

【あらすじ】

とある架空の王国。王宮直属の門番として期待に胸を膨らませ勤務初日に就く門番1（18）。

門番1は殉職した父親の背中を追い門番となった。門番に対する熱い思いを上司の門番2（28）に語るが、「独善家」と吐き捨てられてしまう。

城壁沿いで野垂れ死ぬ浮浪者を荷車に乗せる墓堀人（70）や客待ちをする幼さが残る街娼。「暗君」と書かれたプラカードを掲げ行きかうデモ行進。城門の外ではこれら見慣れた日常が過ぎていく。

門番1は置き引きに遭った瀕死の老婆を助ける。門番2はそんな門番1に「この仕事に情けは不要だ」と一刀両断。

城門に花を手向ける隻眼の少女（18）が気になり、門番1は古参の墓堀人に少女のことを聞く。12年前に城門で起きた暴動事件と関係があると知ると門番1の表情が曇る。

規則を重んじ、真面目に職務を全うしようとする門番１に反し、門番２は金銭と引き換えに不正に通行を許可するなど、汚職に手を染める。そんな彼に対し門番１は怒りを爆発させるが、国王襲撃事件が発生し、門番２は怪我を負う。

門番１は父親の元同僚である衛兵隊長（４２）から父親が命を落とした１２年前の暴動事件の真相を聞く。父親が少女の顔を殴り、右目に怪我をさせたことで起きた事件だった。門番という仕事に幻滅した門番１は、父親の形見の勲章を投げ捨てようとするが、昼間助けた老婆の娘（４８）の応援で思いとどまる。

１０年後、髭を蓄え貫禄がました門番１。しかし、そこには理想に燃えていたかつての姿はなく、不正に手を染め、部下に開き直って持論を持ち出す男がいるだけだった。

【人物関係表】

門番 1（18）（6）（28）新人	
門番 2（28）門番 1 の上司	
隻眼の少女（18）事故で右目を失明	
衛兵隊長（42）門番 1 の父親の元同僚	
墓堀人（70）	
棟梁（45）石工	
物乞い（53）	
老婆（77）	
少女（16）街娼	
中年紳士	
王女（16）国王の娘	
侍女頭（33）王女の世話係	
青年（19）城内への侵入を試みる	
酒問屋主人（50）	
造花売りの女性（22）テロリスト	
中年女性（48）老婆の娘	
門番 3（25）先輩門番	
狐目の男性 通行人	
門番 4（18）門番 1 の後輩	

○教会

喪服姿の参列者のすすり泣きが聞こえる

門番1（6）、棺の前で立ち尽くす。

棺の遺体（門番1の父親だが顔は見えない）の胸には真鍮製の勲章が輝く。

門番1の肩に女性の華奢な手が乗る。

母親の声「あなたもお父様のような立派な門番に御成りなさい。それが国王の為、国の為に命を捧げられたお父様の意思に報いることになります」

門番1、上着の袖で涙を拭う。

○城壁

T・12年後

高い壁が遠くまで聳える。

人々が忙しなく行きかう通りを挟み、林が広がる。

○同・城門

鉄兜と鎧を纏った門番1（18）、高く聳

える石造りの門を見上げる。

門の上部に『(ラテン語で) 門をくぐる
ものは一切の希望を捨てよ』という碑文
が刻まれている。

門番 1、兜を取り、門に祈りを捧げる。

× × ×

門番 1、手に槍を持ち直立不動で門の脇
に立つ。表情は堅い。

隣に立つ門番 2 (28)、頻りに鉄兜の
ずれを直す門番 1を見て、

門番 2 「新入り、初日で緊張するのも分かる
が、もっと肩の力を抜け。一日持たんぞ」

門番 1 「あ、はい」

門番 2 「しかし、お前も物好きだな。こんな
退屈な仕事選ぶなんて」

門番 1 「退屈ですか」

門番 2 「ああ。欠伸が出るくらい退屈だよ
と、大きな欠伸をする。

門番 1 「自分はそうは思いません。門番は偉
大な国王に仕える誇りある仕事です」

門番 2、吹き出して笑う。

門番 2 「なに、お前。本気でそんな風に思っ
てんのか？」

門番 1 「ええ」

門番 2 「こりゃいいや」

と、笑い出す。

門番 1 「面白くありません。俺の村では門番
は皆の憧れの職業です。門番だった父は皆
から尊敬の的でした。俺が門番に決まった
時も親や親戚だけでなく村中が喜んでく
れました」

門番 2 「村って、やっぱお前田舎もんか？」

門番 1 「(ムッとした顔で) いけませんか？」

門番 2 「お前、他人から押し付けられた価値
観で生きて来て今まで一度も疑い持たな
かったのか？」

門番 1 「押し付けられてなんか。門番として
国王や国に奉公するのはこの国に生まれ
たものの務めです」

門番 2 「務めね。昔、お前みたいに世間知ら

ずのくせに理想だけは高く、独善的なのがいたよ。今思い出しても反吐が出る」

と、顔を顰める。

× × ×

門番 1 と 2、石工の棟梁（45）と弟子

（23）から通行証を受け取る。

門番 2、通行証を確認し棟梁に返す。

門番 2 「大変名誉あるお勤め、毎日ご苦労で
あります！」

と、敬礼する。

棟梁 「おいおい、揶揄うなよ。こっちは毎日
気が引けてんだから。周りの風当たりも日
に日に強くなる一方だ」

門番 2 「精々いいの作って下さいよ。後世に
誇れる立派なの。期待してますから」

棟梁 「ムカつく野郎だな」

門番 2、笑う。

棟梁 「そもそもあんなもの誰も望んじやいね
えのによ。つたく、税金の無駄だ、無駄。
おっといけね。そのおかげで俺たちはメシ

が食べてんだった。あんまり悪くも言えねえか」

門番 2 「そうすよ。ちつとは自分の仕事に誇り持った方がいいっすよ」

棟梁 「うつせー」

棟梁、弟子を振り返り、

棟梁 「おい、行くぞ」

棟梁と弟子、城内へ消える。

門番 2 「(棟梁と弟子を見送りながら) ご愁傷様なこつて」

門番 1 「あの人たち、今建造中の王の像を彫ってる石工さんですか？」

門番 2 「ああ。完成したら 18メートルにもなる巨大像らしいが、そんなの見たがるもの好きが何処にいる？」

門番 1 「荘厳だろうな。完成したらそれもう偉大な王に相応しい立派な像になるに違いない。今から待ち遠しいです」

門番 2 「マジかつ！ いたよ、ここに」

門番 1 「何か？」

門番 2 「ホントめでてえヤツだ」

馬の嘶く声がし、一台の馬車が城門の前
で急停止。

馬車に乗った男（24）が、

男「この国に幸あれ！」

と、馬車から人形を投げ捨て走り去って
いく。

門番 1 と 2、投げ捨てられた人形に駆け
寄る。

門番 1、手作り感丸出しの継ぎ接ぎだら
けの人形を抱き起す。

頭に王冠を被り、身に纏うのはパンツの
み。

胸の部分にペンキで『愚鈍』と書かれて
おり、でっぷりと突き出た腹には五寸釘
が何本も刺さっている。

門番 1 「この顔、どこかで……」

門番 2 「現国王だ」

門番 1、間抜けな表情の人形を凝視し、
門番 1 「そう言われると確かに。それにして

も愚鈍とは冗談にしてもやりすぎです」

門番 2 「冗談ね。とりあえずそれ、早く片付けとけ。王の側近に見られでもしたら厄介だ」

門番 1 「あ、はい」

と、人形を背負い上げる。

○城壁の向かいの林

木に寄りかかり座る格好の人形。

その傍で穴を掘る門番 1。

門番 1、手を止め、人形の頭にのった枯葉をとってやる。

○城壁

門番 1 と墓堀人（70）、城壁に寄りかかり項垂れる少年に近づく。

墓堀人、少年の肩を揺すると少年はそのまま地面に倒れ込む。

墓堀人、少年に手を合わせると、

墓堀人「乗せるからそっち頼むよ」

門番 1 「はい」

と、少年の足を掴み、墓堀人と少年の遺体を荷車に乗せる。

門番 1、城壁沿いに座り込む浮浪者たちを見渡す。

死んだ魚のような目をした老若男女が項垂れている。

墓堀人「おい、こっちもだ！」

門番 1 「あ、はい」

と、墓堀人に駆け寄る。

× × ×

門番 2、露出の多い服装に派手な化粧の

少女（16）から紙幣を受け取る。

門番 2、更に少女の手から紙幣を一枚抜き取る。

少女「あ、ちょっと！」

門番 2 「こっちは商売に目を瞑ってやってん

だ。気に入らないなら他所で客を取れ」

と、その場を離れていく。

少女「何さ、いつか地獄に落ちるよ！」

門番 2 「地獄か。ここより少しはマシだろ」

少女、中指を突き立て顔を顰める。

中年の紳士が少女に近づき、

紳士「お嬢ちゃん」

少女「何っ！」

紳士「あ、いや。違ったならいいよ」

少女「あら、お客さん？」

と、紳士と腕を組み去っていく。

門番 2 「アバズレが」

と、壁沿いに墓蔭を広げ項垂れる物乞

い（5 3）に視線を落とす。

門番 2 「おい、あっちいけ！」

と、槍の石突で小突く。

物乞い、顔を上げ、門番 2 を虚ろな目

で凝視する。

門番 2 「何だ、その目は？ そんな目で俺を
見るな！」

物乞い、渋々立ち上がると、ボソボソ

呟きながら門番 2 を凝視する。

門番 2 「こいつ、文句あんのか！」

と、槍の柄で物乞いを壁に押し付ける。

門番 2 「社会のゴミが偉そうにすんじゃねえぞ！ どうせお前なんかそのうち野垂れ死ぬのが関の山だ。いつそ今死ぬか？」

と、物乞いの首に槍を押し付けていく。

物乞い 「(苦しそうに) わ、悪かったよ。頼むから許してく……」

門番 2 、槍を下ろすと、物乞いから離れる。

物乞い、膝をつき、咳き込む。

門番 2 「さっさと消えろ、負け犬が！」

と、物乞いの尻を足蹴りする。

物乞い、莫塵を丸め走り去っていく。

○城門

門番 1 、一人で見張りに立つ。

右目に眼帯を付けた隻眼の少女（18）が門前に一輪のユリを置くと手を合わせる。

門番 1 「ちよつと、君」

隻眼の少女、門番1の声に驚き、駆け出す。

門番1、地面に置かれたユリの花を訝し気に拾い上げる。

門番2の声「またか」

門番1、顔を上げると門番2が立っている。

門番1「あの子を知ってるんですか？」

門番2「毎日飽きずに花を置いていくよ。1

2年前の事件の犠牲者を吊ってな」

門番1「12年前？」

門番2「ああ。この門で起こった暴動事件だ
門番と民衆が犠牲になったらしいが俺も赴任する前のことで詳しくは。あの右目、その時のらしいぞ。あの娘も気の毒にな」

向かいから来た男とぶつかり頭を下げ
足早に走り去っていく隻眼の少女を見
詰める門番1。

× × ×

門番2の隣で落ち着きなく立つ門番1。

門番 2 「そわそわすんな、目障りだ」

門番 1 「実はその……」

門番 2 「何だ？」

門番 1 「ト、トイレに」

門番 2 「トイレだあ？ 工作中だ、持ち場を
離れるな」

門番 1 「しかし、もう限界です」

と、身体をくゆらせる。

門番 2 「ったく、仕方ねえな。ほら」

と、ウイスキーの空き瓶を門番 1 に差し
出す。

門番 1 「これは？」

門番 2 「お前のトイレ」

門番 1 「まさか」

門番 2 「そのまさか。これにすんだよ、早く

！」

門番 1、空き瓶を渋々受け取る。

門番 2 「さっさと済ませろ」

門番 1、門番 2 に背を向ける。
用を足す音が聞こえてくる。

門番 2、声を押し殺し笑う。

老婆の声「み、水……」

瀕死の老婆（77）、門番 2 の背後から
抱きつく。

門番 2「うわっ、なんだ？！」

老婆「頼むから水をおくれ……」

門番 2「離れろ、ババア！」

と、老婆を振りほどく。

老婆はそのまま地面に倒れ込む。

門番 2「（上着の乱れを直しながら）気味の悪い
婆さんだな」

門番 1、老婆を抱き起し、水筒の水を飲
ましてやる。

老婆、水筒の水をがぶ飲みし、

老婆「あー、生き返った！　ありがとね」

と、腹の虫が鳴る。

門番 1、自分の鞆からサンドイッチの弁
当を取り出し、

門番 1「良かったらこれ」

老婆「いいのかい？」

門番 1 「どうぞ」

老婆、サンドイッチを手に取ると、齧り付く。

老婆「田舎から娘を訪ねて遙々出ては来たが途中で置き引きに遭ってね。すまないけど水をもう一杯」

門番 1、水筒を老婆に手渡す。

老婆「(水でサンドイッチを流し込み)有り金全部持っていかれて三日三晩飲まず食わずさ。命からがらようやくここまで辿り着いてね」

門番 1 「娘さん家はこの近くに？」

老婆「ああ。目と鼻の距離さ。でも、とてもじゃないけどもう歩けないよ」

× × ×

老婆、辻馬車から門番 1 を見下ろし、老婆「すまないね。馬車にまで乗せてもらって。お金は娘のところに着いたら直ぐに持って来させるよ」

門番 1 「別にいつでも構いませんよ」

門番 1、御者に、

門番 1「それじゃ、お願いします」

走り出す辻馬車を見送る門番 1。

門番 2、門番 1に近づき、

門番 2「新入り、婆さんにいいカモにされた
な」

門番 1「えっ？」

門番 2「あの婆さんが本当に金返しに来ると
思うか？ 置き引きに遭ったつてのも怪
しいもんだぜ。ああやって人に集るしか能
がねえのさ」

門番 1、小さくなる辻馬車に目をやる。

門番 2「お人よしも大概にするんだな。この
仕事に情けは不要ですから。肝に銘じとい
て下さいね、新入りさん」

と、持ち場に戻る。

門番 1、ムツとした表情を浮かべる。

× × ×

門番 2、近づく野犬に小石を投げつけ、

門番 2「ほら、あっち行け！」

小石が野犬に当たる。

野犬、鳴き声を上げ、走り去っていく。

門番2、それを見て笑って喜ぶ。

門番1、隣で呆れ気味に門番2を見る。

馬の蹄の音が聞こえ、城内から一台の二頭馬車が門へと近づいてくる。

姿勢を正し迎える門番1と2の前で停まる二頭馬車。

二頭馬車には王女（16）と侍女頭（3）が乗っている。

王女、馬車から顔を出し、

王女「いつもご苦労ね」

門番2「はっ！ 私のようなものにそのような
労いの御言葉。身に余る思いです。王や
王女様の為に日々尽くせること、この上な
い喜びと」

王女「もういいわ」

と、門番1に目をやる。

王女「あなた、初めて見る顔ね」

門番1「あ、はい。俺、いや私本日より赴任

しました……」

王女「（門番 1 を遮るように）あれは何かしら？」

王女が視線を向ける方向を振り返る門番 1 と 2。

通りの真ん中で野犬（門番 2 が小石を投げつけていた）が王を模した人形を咥え振り回している。

門番 2 「あの野犬は危険です！ この国を滅ぼしかねない恐ろしい病を持った狂犬です。我々が駆除しますのでそれまで窓を閉めて馬車の中に！」

侍女頭「この者たちに従いましょう」と、窓の扉を閉める。

馬車の中で身を寄せ合う王女と侍女頭。

門番 2 「野犬が何であるの人形を？！ 処分しなかったのか？」

門番 1 「それがその…… 処分するには忍びなくて。すみません」

門番 2 「馬鹿っ！ とにかく王女に気づかれ

たら面倒だ。早く片付けてこい」

門番 1 「分かりました！」

と、野犬の元へ駆け出す。

門番 2、馬車の中で怯える王女に気まずそうに笑いかける。

× × ×

門番 1、野犬が咥える人形を奪おうと人形の頭を引っ張る。

野犬も胴体部分に噛みつき、離そうとしない。

首が千切れ、人形の頭を抱えたまま地面に尻もちをつく門番 1。

野犬は胴体部分を咥え走り去っていく。

× × ×

馬車の扉を叩く音。

王女、恐々窓から顔を出すと、愛想笑いを浮かべ立つ門番 1 と門番 2。

門番 2 「もう心配いりません。危険な野犬は我々の手で追い払いましたので」

王女「(門番 1 に目をやり) 新入りさん、大丈夫

夫だった？　噛まれてない？」

門番 1 「御心配には及びません。この通り何ともございません」

と、人形の頭を持った右手を振り上げる

王女 「そう、なら良かった。ところで右手のそれは？」

門番 1 「あ、いや。これはその……」

と、慌てて後ろ手に人形の頭を隠す。

門番 1 「（苦笑を浮かべ）お気になさらずに」

王女 「そう言えばあなたの名前まだ聞いてなかったわね」

侍女頭 「王女様、もう行きませんと園遊会に間に合いません」

王女 「そうだったわ。じゃあ、また今度聞かせてね、新入りに」

門番 1 「は、はい！」

走り出す二頭馬車に頭を下げ、見送る門番 1 と 2。

門番 2 「ふう、心臓が止まるかと思ったぜ」

門番 1 「すみません。俺のせいで」

門番 2 「今後勝手なことはするな。俺がやれ
と言ったことはやれ」

門番 1 「分かりました」

門番 2 「それ貸せ。処分しとくから」

と、門番 1 から人形の頭を奪い取る。

門番 1 「でも、親しみやすくていい王女様で
したね」

門番 2 、鼻で笑う。

門番 1 「何かおかしいですか？」

門番 2 「親しみやすい？ あのお嬢さんはた
だのほほんと生きてるだけだ。この国の窮
状や自分たちが民衆からどう思われてる
かも知らないで。気楽なもんだぜ」

門番 1 「そんな……」

門番 2 「お前も国の為とかそんな綺麗事は捨
てろ。悪いことは言わん。自分の保身だけ
考えろ、いいな」

と、人形の頭で門番 1 の胸を小突く。

○動く二頭馬車の中

王女と侍女頭、馬車に揺られる。

王女「あの者たちのおかげで大事に至らずに
済んで良かったわ」

侍女頭「ええ、悪い病気が流行りでもしたら
国の存続に関わります」

王女「あの者たちがいればこの国も安泰ね」
『ガタッ』という音がし、馬車の中が激
しく揺れる。

王女「何っ？！」

侍女頭「道端に落ちた木切れかと」

○城壁沿いの道

王女が乗った二頭馬車が次第に小さく
なっていく。

首が千切れた人形（王を模した）が道の
真ん中に落ちており、人形の体には馬車
の轍の跡がくつきり。

二匹のカラスが舞い降り人形を啄み始
める。

○城門・前道路

青年（19）、自分の背丈を優に超える棒を手に城門を見詰める。

青年「何人も僕たちの仲を邪魔することは出来ないんだ。今日こそ、それを証明してみせるからね」

青年、棒で地面を叩き、

青年「今からそっちに行くよ、待っててね」

と、棒を手に城門に向かって走り出す。

○城門

門番1と門番2、叫びながら城門に向かってくる青年に目を向ける。

門番1「な、何ですか、あれ?! こっちに向かって来てます」

門番2「まったく、毎日飽きずによくやるよ」

と、呆れ気味に青年の前に躍り出る。

青年、棒を振り上げ門番2に飛び掛かる

門番2「ほう、今日はその棒でこの俺を組み伏せる気か?」

と、槍を構える。

青年「でーい！」

と、地面に棒を突きたてると、棒高跳びの要領で門番2の頭上を飛び越える。

門番2「な、何っ！」

青年、着地し門番2を振り返り、

青年「じゃあね」

と、城門に向かって再び走り出す。

門番2「しまった、新入り！」

門番1「は、はい」

と、向かってくる青年と対峙する。

青年、再び棒を突き立て飛び上がる。

門番1「同じ手は食わないよ！」

と、頭上を飛び越えていく青年の尻に槍を突き刺す。

青年、悲鳴を上げ地面に落下する。

× × ×

門番1と2の前をうつ伏せで担架に乗せられ運ばれていく青年。

青年の尻に厚く巻かれた包帯。

門番1「ちよつとやり過ぎましたかね」

門番2「何、これで少しは懲りるだろ。アイツ、城内出禁にも関わらず毎回ああやって侵入を試みては失敗してんだ」

門番1「出禁ですか、またどうして？」

門番2「中にある店の踊り子に一方的にいれあげてな。しつこく付きまとうもんだから裁判所命令で城内の出入りが禁止されたんだ」

× × ×

見張りに立つ門番1の脇で腰を下ろし、パイプに煙草の葉を詰める墓堀人。

墓堀人「アイパッチの少女か。なら、よく知つとるよ」

墓堀人、パイプをふかすと、

墓堀人「あの子は12年前の事件が自分のせいで起きたと思いつけておる。そのせいで沢山の人間が死んだと。だから毎日死者を弔いに花を置いて行くんじや」

門番1「彼女は一体」

墓堀人「あの子もまた犠牲者よ。事件で右目を失い、自分だって普通の生活がままならんのかな」

門番1「古参のおじいさんなら12年前の暴動事件について詳しい事情を知ってるんじゃない？」

墓堀人、鼻から大きく煙草の煙を吐き出す。

墓堀人「幼かったあの子はよく父親に連れられてデモに参加しとった」

門番1「デモ？」

墓堀人「当時は国王の執政に対し、民衆の間に不満が噴出し始めた頃でな。民衆派のリーダーが不当に投獄されたのを発端にデモは激しさを増し、連日のようにこの通りを行きかっておった」

門番1「投獄の理由は？」

墓堀人「理由などありません。国にとって目障りな反乱分子は少しでも小さいうちに潰すに限る。ただそれだけじゃ」

門番1「そんなの馬鹿げてる」

墓堀人「怒った民衆が門まで詰めかけ、門番と度々小競り合いになっておった。だが、あの日は小競り合いでは済まなかった」

門番1「少女の右目と関係が？」

墓堀人「一人の精悍な門番があの子の顔に警棒を振り下ろした。右目を押さえるあの子の右手は見る見る血に染まっていき、次の瞬間にはもう……」

門番1「そんな……」

墓堀人「暴徒化した民衆を止められるものなど誰もおらんかった。少女を失明させた門番は殺され、結果多くの犠牲者を出す大惨事となった」

門番1「そんなの嘘だ！」

墓堀人「嘘など言わん！ ワシはこの目ではつきりと見た。門番があの子の顔を躊躇なく殴るところを」

門番1「（首を横に振りながら）そんなはずない！ 門番はこの国の平和を守ってる優秀

な人たちですよ。人を傷つけるなんて」

墓堀人「果たしてそうかう」

門番1「えっ？」

墓堀人「所詮、門番はこの国、いや国王の従僕にすぎん。国王にとって優秀でも我々門の外の人間にとっては」

と、首を力なく横に振る。

墓堀人「おっと、門番のお前さんの前でこんな話、すまん」

門番2、近づいてきて、

門番2「おい、老いぼれ！　いつまでさぼってる気だ。さっさと仕事に戻れ」

と、腰を下ろす墓堀人を足で蹴る。

墓堀人、慌てて立ち去る。

門番2「（俯く門番1に）どうした、新入り。あのじいさんに気に障ることも言われたか？」

門番1「いえ、何でもありません」

馬の蹄の音がし、一台の荷馬車近づいてくる。

門番 2 「これはいいカモのお出ました。さあ
仕事するぞ」

と、御者台の酒問屋（50）に近づいて
いく。

× × ×

荷台に酒瓶が積まれた荷馬車が停まる。

門番 1、帳簿を捲りながら、御者台の酒
問屋に、

門番 1 「ウチでの取り扱いがありませんね。
お通しできません。お引き取り下さい」

酒問屋、困り顔で門番 2 に目をやり、

酒問屋 「あんたからこの兄ちゃんに何とか言
ってくれよ」

門番 2 「（門番 1 から帳簿を取り上げ）規則で
は帳簿にない業者は通せねえことになっ
てる。そうだな、新入り？」

門番 1 「はい！」

門番 2 「そういうことだ」

酒問屋 「そんな殺生な」

門番 2、荷台から酒瓶を一本取り一口。

門番 2 「だが例外も認めないとな。で、早い話今回はいくら出せる？」

酒問屋 「(懐から巾着袋を取り出し) やっぱりあんたは話が分かる」

と、巾着袋の口を開く。

門番 2、間髪入れずに酒問屋から巾着袋ごと取り上げる。

酒問屋 「あ、おい」

門番 2 「(巾着袋の中を覗き込み) 通っていいぞ」

酒問屋 「相変わらず抜け目がねえな。それじゃ遠慮なく」

と、馬車を走らせる。

門番 1 「待ってください！」

と、馬車の進行を止めに入る。

門番 2 「余計なことするな、新入り！！」

門番 1 「しかし……」

門番 2 「さつき程々と言ったはずだよな」

門番 1、荷馬車が城内に入っていくのを渋々見届ける。

○城門・前通り

『この国に愚鈍な国王も王女もいらない』『今こそ圧政に立ち向かえ』『私利私欲に走る為政者を追い出せ』などのプラカードを掲げた人々の行進が続く。

○城門

門番1、イライラを隠せない様子で立っている。

門番1、隣で酒瓶を煽る門番2に、

門番1「勤務中ですよ」

門番2「堅いこと言うな。こんな仕事酒でもかつ食らってねえとやってらんねえよ」

門番1「さっきのは明らかに職務規定違反だ
お金を受け取って不正に通行を許可するなんて。言語道断、上に報告します」

門番2「出たよ、優等生」

門番1「押搦わないで下さい！ 大体あなたはふざけてばかりだ」

門番2「まあ、そう熱くなんなって」

門番1 「言わせてもらいますが、あなたは門番としての資質に著しく欠けている」

門番2 「門番としての資質ね。 けっ、つまんねえこと言いやがるぜ。そんなのクソ食らえだ」

門番1 「な、なんてこと」

門番2 「俺には妻と三人のガキを養う責任があんだ。だが、今の薄給じゃ真面目に働いたところで知れてる」

門番1 「だからって不正をしていい理由にはなりませんよ」

門番2 「俺や家族が路頭に迷ったら誰が助けてくれる？ お前が心酔する国王様か？ 周りをよく見てみる」

と、デモ行進の列や壁沿いに項垂れて座り込む浮浪者たち、浮浪者の死体を乗せた荷車を引く墓堀人を見渡す。

門番2 「こいつらは皆、国王いやこの国に見捨てられたんだ。民衆が苦しんでるのに国王や王女はその民衆から巻き上げた税金

で贅沢三昧。私腹を肥やすこと以外興味がねえ。だったら自分で守るしかねえだろ」

門番 1 「あなたは間違ってる」

門番 2 「正しけりやメシが食えるのか？ おめえみたいな独善家と話しても時間の無駄だ」

と、その場を離れていく。

門番 1 「逃げる気ですか？！」

門番 2 「トイレっ！」

と、城内に姿を消す。

門番 1、城壁を足蹴りしながら、

門番 1 「(壁に向かって)理屈を並べて自己弁護に走ってるヤツが偉そうに言うな！ 大体、俺には空き瓶に用をさせておいて自分は平然とトイレかよっ」

門番 1、右目頭を押さえ、

門番 1 「ヤバい。ピクピクしてきた」

生卵が壁に当たって割れる。

門番 1 が振り返ると少年(11)が立っている。

少年、門番１の顔に生卵を投げつけ、

少年「国王もお前も全員、この国から出てけ

！」

と、デモ行進の列へ走って戻る。

門番１、呆然と進んで行くデモ行進の列
を見届ける。

× × ×

門番１、女性（２２）と対峙し、

門番１「だからさつきから言ってるじゃない
ですか、通行証がないと通せません！」

女性「お願い。これだけ売ったらすぐ出てく
るから、ね」

と、造花の入った籠を見せる。

門番１「駄目です！」

女性「何よ！ この石頭、堅物、唐変木」

門番１「どうぞご自由に」

女性「つままない男。あんた、よく言われな

い？」

門番１「うつ」

と、顔が歪む。

女性「図星のようね。あつ！」

と、明後日の方向を指さす。

門番 1、女性が指す方向を振り返る。

女性「その上単純と来たか」

と、城内へ駆け出す。

門番 1「あ、こらっ！」

と、女性を背後から取り押さえる。

女性「放してよ！ 私は何が何でも通るの」

と、激しく抵抗する。

門番 2、上着の裾で手を拭きながら城内から出てくる。

門番 2「どうした？」

門番 1「この方が通行証がないにも関わらず侵入を試みて」

門番 2、羽交い絞めの女性に目をやり、

門番 2「とりあえず放してやれ」

門番 1「しかし」

門番 2「レディに対する振る舞いにしては手荒すぎるだろ」

門番 1、渋々女性を放す。

門番2「お嬢さん、うちの若いのがご無礼を
どうか許して下さい」

と、頭を下げる。

女性、髪と服の乱れを直しながら、門
番1に颯め面を向ける。

門番2「何か事情がありそうだ。理由を聞こ
うか」

女性「こちらの紳士はお話が分かる方でよか
ったわ」

と、門番2の右腕に抱きつき豊満な胸を
押し付ける。

女性「実は私には年端も行かない妹と弟がい
ますの。母は私が幼い頃に病気でぼっくり
父はというと母を失った悲しみから未だ
立ち直れずに飲んだくれる日々」

と、目頭を押さえる。

女性「私が売るこの造花の僅かな収入だけが
我々家族四人の命を繋ぎとめている次第。
私の帰りを妹と弟がお腹を空かせて待つ
ております」

門番 2 「それは気の毒に。しかし、何も中でなくても稼げるだろ」

女性「とんでもございません。殿方も御存知のはずです。外では食べることもままならず、ましてや造花にお金を出す人なんておりません」

門番 2 「それもそうか」

と、籠の中の造花を一本手に取る。

女性「中々良く出来てますでしょ？ 一番下の妹が作ったものです。まだ幼いですが手先はこの私よりずっと器用」

門番 2 「事情はよく分かった」

女性「それじゃ？！」

門番 2 「だが我々も警備上そう易々と通すわけにもいかん。危険なものを持っている可能性もゼロではないしな」

女性「でしたら私の身体を隈なく調べて頂いて結構」

門番 2 「隈なくか？」

女性「ええ。好きなように」

と、造花で門番2の乳首の周りを撫でる
門番2、露わになった女性の谷間に目を
やり、

門番2「(門番1に)ちよっと外す。お前はち
やんと警備してろ」

門番1「あ、ちよっと……」

門番2と女性、城内へと姿を消す。

× × ×

門番1、手の中の真鍮製の勲章をジッと
見つめる。

門番2、ズボンを直しながら戻ってくる
門番1、勲章をズボンの後ろポケットに
しまうと、

門番1「先ほどの女性は？」

門番2「あ、うん。隅々まで調べたが、危険
はないようだったので通してやった」

門番1「隅々ね。よほどあの女性が良かった
のか随分さっぱりした顔だ」

門番2「な、何だ。その言い方は？」

門番1「正直、あなたには嫌悪感を抱く！

朝からずっとあなたを見てきたが、腹の立つことばかりだ」

門番 2 「それはそれは、お気に召しませんで

門番 1 「大体、あなたにとってこの仕事は何ですか？」

門番 2 「さあな」

門番 1 「(ムツとし) ふざけないで下さい！」

門番 2 「新入りよく聞け。お前がこの仕事にどんな理想を持ったかは知らねえ。だが、これが現実だ。安っぽい理想や憧れなんて捨てることだ、直ぐにな」

門番 1 「安っぽくなんかないっ！！」

と、門番 2 の胸倉を掴む。

門番 2 「おいおい。随分威勢がいいな、若い。お前みたいなのが見てて一番イタいんだよ」

門番 1 「なんだと！」

と、右拳を振り上げる。

門番 2 「どこぞの村の期待を一身に受けて門番になったんだろ？ だが殴ったらそれも

すべてペアだ」

門番1、右拳を震わす。

門番2「ほら、どうした？ 殴りたいんだろ？ 殴ってみろよ！」

門番1、力なく右拳を下ろす。

門番2、襟元を直し、

門番2「けっ、腰抜けめっ」

城内から数人の女性の悲鳴。

衛兵隊長の声「その二人、その女を捕らえろ！ 国王が襲撃された」

ナイフを手に城門に向かってくる造花

売りの女性の後ろから衛兵隊長（42）

と二人の衛兵が追いかけてくる。

門番2、後ずさる。

門番1「（門番2を背後から押さえ）あんたが通した女だろ。自分でケツ拭けよ！」

と、走ってくる女性の前に門番2を突き出す。

女性「どきなっ！」

と、門番2と衝突し、地面に倒れ込む。

門番２、股間を押さえ地面をのたうつ。
股間を押さえる門番２の両手が血で染まる。

二人の衛兵、女性から血で真っ赤になったナイフを奪い、地面に組み伏せる。

女性「（門番２に）報いだ、粗チン野郎！」

衛兵隊長「お前たち身を挺してよくやった。

お手柄だぞ」

門番１「門番としての職務を果たしたまでです」

と、股間を押さえのたうつ門番２の傍で敬礼する。

○兵舎・衛兵隊長室（夕）

西日が室内に射し込む。

窓から外を窺う衛兵隊長の背後に立つ
私服姿の門番１。

衛兵隊長「（門番１を振り返り）君の上司の、
名前何ていったかな。ほら」

門番１、黙ったまま顔を背ける。

衛兵隊長「まあ、とにかくヤツは暫く入院することになった。可哀そうだが、あっちの方はもう使いものにはならんだろう」

と、顔を顰める。

衛兵隊長「何より国王に怪我が無くて良かった、良かった」

と、事務机の前に腰を下ろす。

衛兵隊長「た少し厄介なことが」

門番1「厄介なこと？」

衛兵隊長「国王を襲撃した女テロリストだが

その、彼女が言うには……」

と、頭を搔く。

衛兵隊長「ヤツから性被害を受けたとの申し出があった。まあ、テロリストの言うことだ。罪を軽くするためのデマカセだろう」

門番1「彼女の言っていることは本当だと思います」

衛兵隊長「何だ、見たのか？」

門番1「いえ。直接は。でも」

衛兵隊長「疑わしい行為があったということ

か？」

門番 1、頷く。

門番 1 「そもそもあの人は門番としての資質に欠けています。職務規定を無視し、違反ばかり」

衛兵隊長 「そうか。実はヤツは以前から悪い噂が絶えない男でね。一度調査をと思っていた。この際徹底的に調べて厳正な処分を下す」

衛兵隊長、椅子から立ち上がり、門番 1 に近づく。

衛兵隊長 「どうだね、この仕事は？」

門番 1、押し黙る。

衛兵隊長 「君の親父さんはそれは立派な門番だった。正義感に溢れ決して不正を許さない、私にとって今も理想だ。それ故に勤務中のあの事故には私も心を痛めているんだ」

門番 1 「そんな父の背中に憧れて自分も門番になりました」

衛兵隊長「親父さんもそれ聞いて今頃天国で
きつと喜んでるはずだ」

門番1「でも、本当に父は立派な門番だった
のでしょうか？ 殉職して勲章を貰うに
値するぐらい」

衛兵隊長「どうした、突然？」

門番1「命をかけて国を守った父のことを子
供の頃からずっと誇りに思ってた来ました。
国王から勲章を貰うくらい凄い親父なん
だって周りにも散々自慢して」

衛兵隊長「ああ、これからも変わらず親父さ
んを誇りに思うと良い」

門番1「父が命を落としたのは自ら招いたこ
とではなかったのですか？ あの暴動事
件、父が6歳の少女を殴って失明させたか
ら」

衛兵隊長「あ、あれは職務中に起きた不慮の
事故だ！」

門番1「父が少女に怪我を負わせたのはやつ
ぱり本当なんですネ」

衛兵隊長「ああ。だが、そもそもデモに子供を参加させてる連中が悪いんだ。それに最初から子供を盾にしようとしていたかもしれないしな」

門番1「そうでしょうか」

衛兵隊長「そうに決まってる！ あいつらはそのぐらい平気でやる野蛮な連中だ」

衛兵隊長、門番1の右肩に右手を置き、衛兵隊長「いいか、君には期待しているぞ。我々は選ばれた人間だ。連中の言うことに耳を貸す必要などない。これからも頑張ってくれ、頼んだぞ」

と、門番1の右肩を軽く叩く。

○同・外へ城門（夕）

門番1、兵舎から出てくる。

手に握った勲章をジッと見つめる。

門番1、兵舎の裏手に広がる草むらに向かって勲章を投げ捨てようと振りかぶる。

門番 3 の声「おい、新入り！ お前にお客さんだ」

城門に立つ門番 3（25）と中年女性（48）。

中年女性、門番 1 に頭を下げる。

門番 1、勲章を投げ捨てるの止め、ズ

ボンの後ろポケットに仕舞う。

× × ×

城門の前の通りに辻馬車が停まる。

中年女性「倒れた母を助けて頂いたそうで

私、娘です」

門番 1「あ、昼間の」

中年女性「その上、馬車賃まで立て替えていただいて。これお返しします」

と、金を門番 1 の手に握らす。

中年女性「それとこれ。私が焼いたミートパイ。よろしければ」

と、布包みを門番 1 に手渡す。

門番 1「わざわざすみません」

中年女性「それではこれで」

と、頭を下げ辻馬車に乗りかける。

中年女性「（振り返り）そうだ。母があなたのことをとても気持ちの良い青年と。母の言う通りね。お仕事頑張ってくださいね、新入りさん。母と応援してますから」

中年女性を乗せた辻馬車が遠ざかっていく。

門番3、門番1が手に持った布包みに鼻を近づけ、

門番3「美味そうな匂いだ。中身は何だ？」

門番1「うん？ ミートパイ」

門番3「俺にも分けてくれ」

門番1「駄目、これは俺のです」

門番3「なんだよ、ケチッ」

門番1「じゃあ、帰ります」

と、足取り軽く通りを歩いていく。

○城壁沿いの通り（夕）

痩せぎすで狐目の男性、隻眼の少女を通りの真ん中で大声で責め立てる。

狐目の男性「いてえよ。あんたがぶつかって
きたせいで右腕が折れちまった。どうして
くれんだ、ああ？！」

隻眼の少女「すみません、この通り目が不自
由なもので」

狐目の男性「何？ あんた、ハンディキャッ
プを言い訳に開き直る気？ いいご身分だ
ね！」

隻眼の少女「いえ、そんなつもりは。どうす
れば許していただけですか？」

狐目の男性「金払えよ、金。腕が折れてんだ
医者に行く治療費だよ」

隻眼の少女「生憎、持ち合わせがございませ
ん」

狐目の男性「舐めてんのか、このアマ！」

と、隻眼の少女の肩を掴む。

門番 1 の声「まあまあ」

通りかかった門番 1 が狐目の男性を宥
める。

狐目の男性「何だ、あんた。こいつの知り合

いか？」

門番 1 「お金なら俺が払いますから」

と、懷から紙幣を取り出し、狐目の男性の右手に握らす。

門番 1 「さあ、これで勘弁して下さい。それにしても骨折してる割にお金はちゃんと受け取れるんですね、その右手」

と、金を握りしめる狐目の男の右手を見る。

狐目の男性「こ、今回はこれで勘弁してやる気をつける！」

と、紙幣を懷に仕舞うと、足早に去っていく。

× × ×

門番 1 と隻眼の少女、並んで歩く。

隻眼の少女「さっきは助けて頂いて有難うございます。あなた、今朝城門の前で」

門番 1 「ええ、あそこの門番です」

隻眼の少女「助けて頂いてこんなこと言うのもあれですが、私門番が嫌いです」

門番1「ええ、知ってます」

隻眼の少女「えっ？」

と、驚いた表情を浮かべる。

門番1「実は、その俺……」

隻眼の少女の腹の虫が鳴く。

隻眼の少女「（恥ずかしそうに）ご、ごめんなさい。朝からずっと何も食べてなくて」

門番1「そうだ。良かったらこれ一緒にどうです、ミートパイ？」

と、ミートパイの小包を隻眼の少女に差し出す。

○三叉路脇の草むら（夕）

大きな岩の上に腰を下ろし、ミートパイを頬張る門番1と隻眼の少女。

隻眼の少女「私、門番は好きじゃないけど、このパイは好き」

門番1「同感」

隻眼の少女「（プツと吹き出し）おかしな人」
門番1「良かったらもう一つどうです？」

隻眼の少女「いただきます」

と、パイを一切れ手に持ち幸せそうに
頬張る。

○城壁

T・10年後

男児1と2、笑いながら城壁に落書きする。
(この時点で何の落書きか分からない)
い)

門番1の声「おい、お前たち！　そこで何やってる？！」

逃げようとする男児2の首根っこを掴む口ひげを蓄えた門番1(28)。

門番1、頭に短剣が刺さる間拔けな表情のトガ姿の男の拙い城壁の落書きを見て目を細める。

男児1「やべっ」

門番1「ほう、中々良く書けてるな。ちよつとそれ貸せ」

と、男児1からクレパスを取り上げる。

門番 1、クレパスで『暗君再び』と落書きに書き足し、

門番 1「いいか、お前たち。結局、権力者としての皆同じだ。権力を持つとどんな立派な人間でもおかしくなっちまう。よく覚えとけ」

と、振り返ると、男児 1 と 2 は遠くへ駆け去っている。

門番 1「あいづらにはまだ分かんねえか」
と、クレパスを真上に放り投げ、再び掴み取る。

○城門

門番 4（18）、緊張した様子で見張りにつく。

戻って来た門番 1 に、

門番 4「見回りお疲れ様です！」

と、姿勢を正す。

門番 1「堅いな、新入り。緊張してるか？」

門番 4「はい、少し」

門番 1 「初日で無理もないが、もう少し肩の力を抜け。一日持たないぞ」

門番 4 「は、はい」

一台の荷馬車が門の前で停まる。

門番 4、帳簿を捲りながら、

門番 4 「帳簿にありませんね。申し訳ないですけれど、お通し出来ません」

門番 1、門番 4 から帳簿を取り上げ、

御者台の初老の荷主に、

門番 1 「で、いくら出せる？」

門番 4 「えっ」

と、戸惑いの表情を門番 1 に向ける。

× × ×

城内へ入っていく荷馬車。

門番 4 「そのお金」

と、門番 1 が手に持つ錢袋を見る。

門番 1 「これか？ 臨時収入だ」

門番 4 「お金で取引のない業者を通すなんて

明らかな規則違反です！」

門番 1 「だからなんだ？」

門番 4 「自分が何を言ってるのか分かってますか？ 不正を働いたんですよ」

門番 1 「そんなの言われなくても分かってますよ」

門番 4 「なら何故？」

門番 1 「永くいると要領ばかり良くなっちゃうもんだ」

門番 4 「はあ？ 開き直らないで下さい」

門番 1 「もう 10 年だ。腐敗した王制が倒れて共和制になったのは。でも、何も変わってねえ。当時はまだお前子供か？」

門番 4 「そうですけど」

門番 1 「なら覚えてねえか。それまで信じたものが全て否定された気分だったぜ。これからは新しい価値観で生きるんだってそう自分に言い聞かせたもんだ」

門番 4 「一体何の話ですか？！」

門番 1 「いいから黙って聞け！ 結局共和制になったとて権力者は相も変わらず腐敗しきってる。だったら俺たちは何を信じて

生きていけばいい？」

門番4 「そんなの分かりませんよ」

門番1 「信じていいのはな、自分だけだ。結局生きる術を覚えて上手く立ち回るしかねえんだよ」

門番4 「あなたは屁理屈を並べて自分を正当化しようとしているだけだ！ 到底容認できません」

門番1 「けつ。昔、お前みたいに世間知らずのくせに理想だけは高くて独善的なのが出たよ。今思い出しても反吐が出る」

と、錢袋を強く握りしめる。（了）